

さねとう あきら 児童文学者・劇作家

1935(昭和10)年～2016(平成28)年

1. 経歴・狭山市とのかかわり

1935(昭和10)年1月16日、さねとうあきら(本名・実藤 述)は東京府東京市大森(現・東京都大田区)に生まれる。1941(同16)年、赤松国民学校(現・赤松小学校)に入学するが、1944(同19)年、父方の伯父を頼って広島県竹原市に疎開。1948(同23)年、中野区立第六中学校に入学すると演劇部に入部し、総合芸術の魅力に取りつかれた。その頃、中学校仲間と民話劇に取り組み演劇を始める。1951(同26)年、早稲田大学附属高等学院に入学し、1954(同29)年、早稲田大学第一文学部演劇科に入学する。



1986(同61)年、51歳の時、15年余り住み慣れた所沢市若狭から狭山市水野に転居する。以来、雑木林の豊かな自然の中で30年間過ごし、2016(平成28)年3月7日、多くの傑作を残し逝去。享年81であった。そして、「さねとうあきらを偲ぶ会」が発足すると、全国から多くのファンが集まった。ちなみに、令和版狭山市郷土かるたに「民話から 生き方問うた さねとうあきら」と詠まれる。

2. 主な業績

1972(昭和47)年、37歳の時、処女作の創作民話集『地べたっこさま』を出版、日本児童文学者協会新人賞と野間児童文芸賞推奨作品賞を受賞。その著作をとおして、素朴で純粋な人間だけでなく保身や裏切りに走る民衆の影を描き、創作民話の新たな方向性を開拓した。

1974(同49)年、代表作『おこんじょうり』で野間児童文芸賞推奨作品賞を受賞。「九州へ講演に行った時、小学4年生の女の子が『いい昔話があるよ』と、『おこんじょうり』を見せてくれました。そんな出来事が作家冥利に尽きます」と述べている。1979(同54)年、『ジャンボココの伝記』で小学館文学賞を受賞。さらに『ゆきこんこん物語』や『かっぱのめだま』、『神がくしの八月』、『とりかごなんかいらぬ』、『東京石器人戦争』等多くの作品が読者を魅了した。民話劇の創作に取り組み、多くの作品が全国各地で公演されている。

3. 特筆

彼は狭山市の文化や民俗にも深く関心を持ち、郷土に題材を取った『さやま民話風土記』を発表する。第1回の狭山市民芸術祭では、市民参加の劇を企画・構成・演出し、創作ページェント劇「狭山いまむかし(道・土・炎)」を公演した。また第10回には、「さやま民話風土記」を上演した。さらに、狭山市の魅力をちりばめた「さやまふるさと音頭」は、「桜まつり」や狭山市民芸術祭で狭山市民により歌われている。

〈参考文献〉 さねとうあきら評論集『状況の中の児童文学』明石書店